優秀賞

安心って何だろう？

大阪府　大阪市立井高野中学校　一学年

荒木　沙羅

去年までの私は、〝安心〟という言葉を深く考えたことがありませんでした。家族でご飯を食べ、学校へ行き、部活動や塾で勉強をして、夜までには家に帰る。そんな毎日を、当たり前だと思っていました。

去年の冬、父が突然、心臓の病気で入院しました。入院は約一カ月でした。病院では感染対策のため、家族でも未成年は面会ができませんでした。

学校や遊びから家に帰っても玄関に父の靴がありません。父がいないので、家の中はいつもと同じはずなのに、何か大切なものが抜けおちたように感じました。『父は、本当に大丈夫なのかな。』そう思っても母も心配しているのが分かるので、私はなかなか口に出せませんでした。やっと父が退院した日は、とても嬉しかったです。しかし、父はすぐには仕事に行けませんでした。病院へ行く日とリハビリをする日以外は、ほとんど家で過ごしていました。毎日パリッとした服で朝早くから出勤していた父が働いていないように見え、私は生活のことまで不安になりました。そんな中、父が言いました。「保険に入っているから、今は治療に集中できる。」と。

私は、生命保険は人が亡くなった時のためのものだと思っていました。しかし、父は病気で働けない間の生活を支えてくれる生命保険にも入っていました。「病気だけでもつらいのに、お金の心配までしてたら、前を向けない。」

その言葉を聞いて、生命保険は、ただお金を受けとるものではないと知りました。治療に必要な時間を守り、家族の不安を小さくして、再び前へ進むための支えになるものだったと分かりました。

退院後、父の友人や知り合いが家を訪ねて来ました。父は楽しそうに話し、みんな笑っていました。病気なのに、なぜあんなに笑えるのだろうと不思議でした。すると、父は、「一人で悩まんで良いと思えるだけで、人は元気になれる。」と言いました。

父は以前から、私に二つのことを話していました。

一つは、人生の不安や危険をただ怖がるのではなく、正しく知り、自分に合った備えをすること。もう一つは、困った時に相談できる人とのつながりを大切にすることです。

父が病気になって、その意味がよく分かりました。保険という備えがあり、医師や会社の人、友達、家族など、支えてくれる人がいたからこそ、父は治療を

続けられたのだと思います。

最近父は久しぶりにパリッとした服を着て革靴をはいて、「行ってきます。」と家を出発しました。その後ろ姿を見送りながら、私は胸が熱くなり感動しました。

私は今、中学校のサッカー部に入り、近くの中学校との合同女子チームで主にディフェンダーとして練習をしています。体力づくりは苦しいですが、少しずつできることが増えてきました。ディフェンダーは、目立つゴールを決める役割ではありません。しかし、相手の動きを見て危険を予測し、一歩早く備えることで失点を防ぎます。また、一人では守れません。仲間と声をかけ合い、助け合うことが必要です。私は練習中に、父が言った言葉の意味が分かった瞬間がありました。危険を正しく知って備えることも、人のつながりを大切にすることも、サッカーと人生、どちらも同じだと思いました。

安心とは、何も悪いことが起こらないことではなく、病気になることなど、思い通りにならないこともあると思います。それでも、もしもの時に備えて、支えてくれる人がいて、また前に進めること。これが本当の安心なのだと思います。

生命保険はサッカーのディフェンダーのように、普段は目立たなくても、大切な物を守ってくれます。私も将来、安心を届けられる人になりたいです。